

2016年度短期大学部自己点検・評価(幼児教育学科)

短大基準協会	2016年度事業計画	内容と成果	課題	備考
基準Ⅱ 教育課程と学生支援				
A 教育課程				
1 2016年度の主な教育活動	・教育活動の学年暦			学年暦(資料 A)
2 教育課程編成・実施の方針	・コース制	<p>3つのコースからなる専門ゼミナールでは、「あそび」の実践を通して「あそびスター」への移行を図るため、コースとしての特色を見直し、理解ある地域との連携のもと、充実した教育活動が展開できた。中でも、タイ王国の特別支援学校幼稚部との交流が実現し、障がいの有無に関わりなく、国内外における幼児期の「あそび」の重要性と支援の在り方について追及できたことは画期的であった。それらの成果を卒業レポートや要旨集にまとめ、保育フォーラムにおいて特色ある内容の発表ができた。桐が丘幼稚園児との合同観劇鑑賞会では、幼児の純真で素朴な感動表現を目の当たりにした多くの学生が、振り返りの中で、幼児の「ありのままの心」を</p>	<p>専門ゼミでの学びが現場での即戦力に直結するよう、定期的な教員相互の情報交換とその後の指導の方向性を見出すべく、専門ゼミ委員会としての年間計画はたっていたが開催・実施は難しく、各ゼミ独自での遂行となった。また、成果の発表方法は、代表ゼミの代表学生が発表するという形式であった。充実した内容ではあったが、時間をかけて全学生が発表できるものへと移行することで、学生相互の学びが深まり、各自の研究がより充実したものになると考える。この点を再検討して行きたい。また、「書く力」の育成については、外部業者による客観的評価の導入</p>	
4 学習成果の査定	・実習生の保健・安全	<p>今年度も実習委員会を毎月1回開催し、各実習指導担当者が共通理解することや問題点について話し合い、指導内容について確認しあうことができた。</p> <p>昨年度の課題であった実習指導書の保健・安全についての内容を変更し、今年度から実施した。特に問題点や支障はでなかった。</p> <p>実習前のオリエンテーション報告書の提出が徹底せず、実習直前に提出したり、提出しないまま実習に入る学生がいた。全員が提出するように、提出状況を実習センターが把握して学生に伝え確実に提出するようにする。また提出期日までにオリエンテーションがない場合には学生がセンターに報告することにした。</p> <p>実習交流会は事前に話し合いを密にして、細かく計画を確認していったので、問題なくすすめることができた。内容も学生主体で話し合いができ、充実することができた。</p>	<p>実習事前指導の授業で学生が実習園に提出する書類作成の時間に個別指導を要し、多くの時間が必要になってきた。書く力や聞く力の基本的な力の弱さを感じる。この点については他の科目も同じである。</p> <p>昨年度の課題でもあった基本的な挨拶・コミュニケーション・日誌の記録の不備などの指摘が多いことは、学生の個人差は大きい実習に臨むための基本的な姿勢として、継続してきめ細やかに指導していく必要がある。</p> <p>今までに身体を使って遊ぶ経験が少なかったのか、身近な遊びさえ体験していない学生が多くなってきた。この状況についても指導内容に生かしていくと良い。</p> <p>指導マニュアルの用紙のデジタル化をしておくといろいろ便利なので、全部の指導書のデジタル化をする。</p>	

2016年度短期大学部自己点検・評価(幼児教育学科)

短大基準協会	2016年度事業計画	内容と成果	課題	備考
5 学生の卒業後評価	・現場ニーズの把握	2016年度は未実施。		
B 学生支援				
1 学習成果獲得に向けた教育資源の有効活用		2016年度は未実施。		
2 学習成果獲得に向けた組織的学習支援	・初年次教育	<p>2016年度は、1年先生の基礎ゼミの時間を利用して入学当初の学生の「書く力」の調査を実施した。保育士の使用頻度の高い漢字、敬語、1つの言葉から連想される語彙力、作文の4項目においてそれぞれ採点をし、作文に関しては第三者の目を通して共通の視点で評価を行った。2015年に目標としてあげた「基礎・基本となる学習能力の習得」のために、1年次と2年次の効果測定を実施することとなっている。</p> <p>5月に実施した調査では、漢字の書き取りは差が出ることは少なかったが、作文においては評価の高い出身校が絞られ、今後初年時教育の結果を入試広報への生かすことができる可能性が見られた。</p> <p>また、基礎ゼミのみならず、実習指導や教科で「書く力」の強化をし、初年次教育を学科全体で取り組む体制作りがされた。</p>	<p>本来大学生は自らが自身の課題に気づき、問題解決を行っていくことが理想であるが2016年度入学生は特に大学生活に慣れることが困難な学生や目的意識を喪失した学生が多く見られ「基礎・基本となる学習能力の習得」以前の問題を抱えており、初年次教育のもう1つの目的である「保育観・職業観」を育てるプログラムの充実をはかることが必要になってきた。</p>	
	・新入生研修	<p>2016年度も1年生基礎ゼミナールにおいて入学当初に新入生研修を実施した。目的は学生のコミュニケーション能力を高め、大学生活への早期適応を図ることとした。本年度は4月20日に行った。研修先は郡上市八幡町総合文化センター及び同市大和町古今伝授の里であった。主な研修内容は、①「郡上市の子育て」についての講演（郡上市総合文化センター）、②ゼミ活動（古今伝授の里）であった。①についてはを郡上市の行政に携わる本学の卒業生から直接賜ることが出来、学生も親近感ある受講姿勢であった。②についてはグループディスカッション形式で実施した。また自然を散策しながら、学生、教員が交流し、新しい学生生活の、より良い第一歩を築く成果をあげた。</p>	<p>2016年度も1日の行程で郡上市（地域連携協定市のひとつ）で研修を実施することが出来た。昨年度の反省として、限られた時間内での研修内容についてあらためて整理し、時間的余裕をうみだすプログラムを組むことが課題であった。このことをふまえ、今年度は古今伝授の里でのプログラムを見直し、ゼミ活動に時間をかけたところ、じっくりと交流を進めることが可能となり、学生達も落ち着いた行動が出来たと感じた。今後の課題としては、100名もの学生の食事時間が入れ替え制であるため、前半後半の間にロスタイムが出来てしまった。また、団体行動に抵抗を示し、不参加になった学生もあり、全員が参加できる配慮の必要性も感じた。</p>	

2016年度短期大学部自己点検・評価(幼児教育学科)

短大基準協会	2016年度事業計画	内容と成果	課題	備考
	<p>・1・2年ゼミナール検討会</p>	<p>2015年度に引き続き「ゼミ運営委員会」という名称で実施した。2016年度は新入生研修のふりかえり、保育フォーラムの実施について検討を行った。新入生研修については、活動の中心となった1年ゼミ担当教員のふりかえりのみならず、2年ゼミ担当教員による客観的な視点からの意見を加えることができたため、来年度に向けての改善の提言ができた。保育フォーラムの実施に向けての検討については、同日に実施される「こども未来セミナー」との調整を行う上で、それぞれに関わる教員と一緒に検討を行う機会とすることができた。本委員会は、普段は個別に活動している1年ゼミと2年ゼミが唯一意見交流ができる場として、貴重な役割を果たしていると言える。</p>	<p>ゼミ運営委員会代表の不手際により、今年度も開催される回数がわずか2回と少なかった。1年ゼミと2年ゼミの活動の橋渡しを行う委員会であるため、両学年が合同で行う行事等について早めに検討を始める必要がある。また、それぞれの学年の活動状況がお互いに理解できるような意見交流や相互評価等を活発に行うことができる委員会として機能すると良いと思われる。</p>	
	<p>・教職実践演習の充実化会議</p>	<p>科目名称変更から2年目となる本年度は担当者が2名変更され、新たな体制となった。外部講師の選定については、昨年同様2年生ゼミ担当者会議において授業内容に合わせた形で検討、実施した。外部講師については本科目の趣旨に照らし合わせて、保育所及び幼稚園の園長方への講演依頼をした。保育所園長からは2年生最後の学外実習の直前の10月に記録を通しての子ども理解のあり方について、幼稚園園長からは1月最終授業近辺に保育者としての心構えについて、講演いただいた。</p>	<p>次年度以降、教職課程の再課程認定審査が予定されていることも在り、学修内容及び担当者について、年度当初から学科会議やゼミ担当者会議にて引き続き検討する。</p>	
	<p>・ボランティア活動</p>	<p>本学科の学生は、地域における多くのイベント活動に参加して成果をあげている。ボランティア活動の内容によっては、事前に製作等の準備が必要な場合や、ボランティア参加学生のためにスクールバス運行の手配が必要となることもある。そのため、昨年度から、ボランティアにおける製作費用およびバス運行代等の予算を学科予算に組み込んでいる。さらに、学内外の助成事業の予算を獲得できるように努めた。今年度は学内の地域貢献事業助成を「長良川鉄道あそびスタートレインの企画・運営」「SEKIいきいきフェスタ2016”カプラ”ブースでの試み」の2件と、学外の助成事業も獲得し活動を実施した。なお、学生が参加したボランティア活動については、資料参照とする。</p>	<p>今後さらに、本学科で学んだ専門知識や技術を活用して多くの学生が地域でのボランティア活動に参加できるように促していく。さらに、参加する学生の安全を優先させるため、学生の自家用車による移動を抑えバスの運行等の確保に努めていくことが望ましいと考える。そして、ボランティア活動における保険に関しても、学科としての取り組みだけではなく大学としてボランティア保険に関する共通の制度体制を整える必要がある。ボランティア学生が地域に赴くことは、本学の広報ともなり得るため、より一層の参加者増加に向けて大学をあげてバックアップ体制を整えていく。</p>	<p>2016年度幼児教育学科ボランティア実施一覧(資料B)</p>

2016年度短期大学部自己点検・評価(幼児教育学科)

短大基準協会	2016年度事業計画	内容と成果	課題	備考
	・保育フォーラムの充実	毎年1月第4土曜日に保育フォーラムを開催している。本年度は2017年1月28日に開催した。1年基礎ゼミでは1年間の活動を4ゼミ代表者がパワーポイントを利用して発表した。2年生専門ゼミは昨年度と同様に、3コースそれぞれ1ゼミの代表者発表とした。ゼミの「学びの発表」後、卒業生と在學生との交流会を開催した。社会人となった先輩から現在勤めている職場の状況や専門職の意義、大学在籍期間の学修の重要性について直接話を聞くことで、在學生は学びの意義をより強固にしたと共にこれから就職する職場での見通しが持つ不安等を緩和することができた。また、卒業生にとっては、社会人としての自らの1年間を省察し、仕事に自信と誇りをもつ機会ともなっている。本年度も保育フォーラム全体(事前準備を含め)を学生(書くゼミ代表フォーラム委員)の主導でそれぞれの発表に対する進行や講評、卒業生との交流会を積極的に運営することができた。	今年度で7回目の実施となり、本学科の行事として定着しつつある。今回は2015年度の卒業生4名が、在學生とのトーク交流会に出席した。約10年前までの卒業生に案内を発送したが、毎年卒業生の参加協力を得ることが難しくなっている。卒業生への広報をより積極的に行い卒業生が勤めている職場への直接依頼することも必要がある。本フォーラムは、2年間の学びを各自が省みて卒後の保育者として社会の中でのあり方を確かめると共により職場への適応を促すことを保証するという意図から開催してきた。より現場を考えた卒業生と在學生との交流の具体的なあり方を優先する方向で検討する必要がある。次年度は、さらに保育フォーラム企画の段階から学生も参加させ、内容の検討を含め準備を進めていくようにし	2016年度 保育フォーラムプログラム(資料 C)
3 学習成果獲得に向けた学生への組織的な生活支援		経済的な理由で学業の継続が難しい学生が増加する中、本年度「岐阜県保育士修学資金貸付制度」が開始され、幼児教育学科1年生では、窓口である学生課より、全員に説明会を開催、ゼミ担当者と相談しながら申請、書類作成し、応募者全員が貸付対象者に選ばれた。県内合計20名の枠に全員が採用されたことは快挙である。これにより、貸付対象者となった学生は、以前にも増し、出席態度など、受講姿勢をより良い方向に改めていくことが出来、相乗効果であると感じている。また、その他の奨学金についても、多くの学生が利用している現状は、今後もさらに生活支援を強化し、また返済プランの見通しも含め学習成果獲得に向けての重要事項であると考えられる。	平成28年度から実施された「岐阜県保育士修学資金貸付制度」については、1年生の応募者全員が貸付対象者となることが出来た。しかし、平成29年度の保育士修学資金貸付制度の貸付対象者の変更が岐阜県から通知があり、この事業の貸付対象者が、在學生にも拡大されたことはよいが、岐阜県内の養成校に限らず県外養成校にも拡大され、本学からの申請者の採用が厳しくなることが予想される。今後も経済的な支援として、各種奨学金の利用状況など、学生個々の生活支援をつぶさに見ていくことが必要である。と同時に、学科全体としても学生が安心して学べる環境づくりの一環として、学科会議で毎回議題に挙げている、学生の現況報告を共有していくことが必要であると考えられる。	
4 進路支援		2016年度は2015年度より更に学生の就職内定が早く、ほぼ希望とおりの就職先へ就職が決定する学生が多かった。公務員講座の申し込み及び受講者が多く、その成果が見られ昨年同様7名の公務員合格者が確保できた。しかし、近年の傾向として就職活動を積極的に行わず、キャリア支援センターへあまり足を運ばない学生も見られ、社会人になる意識や就労意識が希薄になってきている。また、幼稚園や保育所に就職する学生だけでなく障がい者施設や児童擁護施設への就職希望者も増加しつつある。保育士としての就職に比べ幼稚園教諭として就職する学生の数が少ない。幼稚園教諭として多くの学生が就職するには、	今年度就職に苦戦している学生の傾向は、飛騨地区での地元就職を希望している学生であった。毎年本学から多くの卒業生が飛騨へ帰っての就職を希望しているが、就職先が多くなり離職者も少ないため、なかなか欠員が出ない状況がある。最後まで地元での就職を希望し、臨時採用の募集が出るまで待ち続けるため、就職内定時期がかなり遅くなっている。飛騨地区の情報をキャリア支援センターと共有し学生に伝えていくことが重要である。	2016年度進路実績(資料 D)

2016年度短期大学部自己点検・評価(幼児教育学科)

短大基準協会	2016年度事業計画	内容と成果	課題	備考
5 受験生に対する受け入れ方針の明確化	・ 学科教員の高校訪問	過去5年間の受験実績を基に抽出した41校を対象として、本学科教員が入試広報課員とともに高校を訪問した。教員1名あたり4~5校を担当した。訪問時には、訪問高校の出身在学生の短大生活や進路(就職)の状況を伝えながら、本学科での学びがどのように卒業後の進路につながっていくのかを具体的に説明し、理解を得ることができた。進路指導を担当する教諭と直接意見交換することで、本学科希望者または保育者を希望する生徒の動向をリアルタイムで得る機会となった。また、昨年度からは、在学生の写真とともにその学生からの現状報告・本学科のおすすめポイントなどを盛り込んだ「在生からのメッセージ」というポスター(A4版)を作成し、進路指導関係の掲示板への掲示を依頼した。この在学生の笑顔とメッセージは高校側から好評だった。	高校側、教員、入試広報課の三者のスケジュール調整が困難であるため、より多くの高校へ足を運ぶことが難しい状態である。加えて、高校訪問を実施する他学科も増加したこともあり、人的環境の不足が認められる。高校側の煩雑さを考えると、学内での他学科との訪問時期や訪問校の選定、回数等の調整が課題となる。	
	・ 出前授業	出前授業は受験生受入れの初期段階として重要である。高校内での開催により、進路決定の手段としてより多くの高校生が体験できる利点がある。年々、高校との信頼関係が深まり、本学科指名数が増加の傾向にある。短大教員による授業は、入学後必要とされる学習力を示す機会でもあり、新生の初年次教育の先駆けとして有効である。次の段階として、オープンキャンパスなど学びの場へ足を運び、短大での学びの心構えを深めることができる。このような段階的啓蒙は、保育者養成課程への滑らかな移行に有効である。	出前講座は高校主宰であり、年度初めに年間計画が立たないため、教員や短大行事等のスケジュール調整が困難である。講義演習の体験のほか、受講生との質疑応答の時間があるとよい。また、出前授業から進路説明会、オープンキャンパスへの進展も検証できるとよい。	2016年度出前講座一覧(資料 E)
	・ 高大連携科目	済美高等学校との高大連携科目である「保育・教育 はじめの一步」を、教育学部とともにオムニバス形式で実施した。本年度は昨年度より受講者数が減少し、2年生22名、3年生2名合計24名の参加となった。本学科からは5名の教員が授業を担当し、保育内容言葉、遊びへの理解や子ども理解を深めた。本年度は将来、保育者としての学びを深めるため、大学祭での学科企画として実施される「わくわく遊び子どもむら」や「プロムナードコンサート」に参加するなど、学びを深める機会を設定した。本科目は、入学後に大学の単位として認定されることもあり、参加した高校生は真剣な眼差しで受講していた。	昨年度に比べて、受講者数が減少しているが、今後は受講者数の増加を図りたい。昨年度、高校側と協議をすることを予定していたものの、日程調整等により開催できなかつた。次年度については講座内容の検討や参加者増加対策を含めて、済美高校教員と協議し、さらなる充実を図る。	2016年度済美高校高大連携科目(資料 F)

2016年度短期大学部自己点検・評価(幼児教育学科)

短大基準協会	2016年度事業計画	内容と成果	課題	備考
	・高校生向け講座	本学科の入学前調査で明らかとなった「入学後の不安科目」である実技2科目(音楽と造形)の、学習体験と入学までの学びのサポートを目的に開講した。本年度は7/30土曜の開講として一人でも多くの高校生の参加が得られる日程とし、15名の高校生の参加があった。さらに、新しい企画として、1年生の授業である「あそびすと養成講座(劇団風の子のワークショップ)」を在学生とともに受講する体験を組み入れた。幼児教育学科の授業体験により、保育の世界への理解と興味関心の促進が図られた。受講した高校生(1~3年生)にとっては、入学前に押さえておくべき内容を理解することができ、入学後の不安を解消できる機会になったと思われる。よって、本講座は入学前教育の一部と位置づけることが	7月末の開講であったが、昨年の8月実施と比べ若干参加人数が増えたものの、やはり、高校にとってこの時期(夏休み前半)は他の行事と重なり参加人数が少なかった。土曜日に通常の授業を行ったことの効果ははっきりしなかった。また、内容は、音楽、造形、の両方の体験希望者が多く、同時開講であったことのデメリットともとらえられる。	2016年度表現講座(資料 G)
基準Ⅲ 教育資源と財的資源				
A 人的資源				
1 教育課程編成・実施の方針に基づく教員組織の整備				
	・教員研修の充実	保育者養成に関する情報を共有するために、保育士養成協議会全国セミナー(2名)、中部ブロックセミナー(1名)、同会研修会(2名)に代表者が参加した。学科内では共同研究として「初年次教育-書く力の向上-」を進めてきた。学生への継続的な調査により、基礎学力向上に有効な方法を検討している。学外競争研究資金については1名が研究代表者として科学研究費助成金を受託し、今後3年間の研究継続を予定している。また、学内特別研究費に2名が採択され、1年間の研究に取り組んできた。それぞれ、成果発表を準備している状況である。研究活動には全教員が積極的に取り組もうとする態勢がある。2017年度の科学研究費助成金に全学科教員が申請している。	2018年度の保育士養成協議会・全国セミナーの岐阜地区開催に先立ち、2016年度は2名の教員が全国セミナーに参加した。2017年度には全学科教員が、全国セミナーあるいは中部ブロックセミナーに参加できるように日程調整に努力したい。また、東海圏での大学間連携をも考慮しつつ、各種研修会に学科教員が参加協力できるよう、一層努力したい。2017年度科学研究費への申請については、研究代表者として7件、現在研究中の1名以外の専任教員全員が応募している。今後、幅広く外部研究資金獲得に挑戦するよう、各教員の積極性に期待したい。また、本年度開始した学科教員の共同研究に関しては、学内の研究助成金を確保し、継続・発展的に進めてい	2016年度研究費採択状況(資料 H: 科研費, 資料 I: 特別研究費)
3 学習成果を向上させる事務組織の整備				
4 人事管理				
B 物的資源				
1 校地・校舎・設備等の整備				

2016年度短期大学部自己点検・評価(幼児教育学科)

短大基準協会	2016年度事業計画	内容と成果	課題	備考
2 施設設備の維持管理				
C 技術的資源等その他教育資源				
1 学習成果を獲得させるための技術的資源の整備				
D 財的資源				
1 財的資源の適切な管理				
2 財政上の安定確保の計画策定と管理				
IV リーダーシップとガバナンス				
A 理事長のガバナンス				
1 学校法人の管理運営体制確立				
B 学長のリーダーシップ				
1 教授会等の教学運営体制の確立				
C ガバナンス				
1 監事による業務の適切性				
2 評議員会の活動運営の適切性				
3 ガバナンス機能の適切性				

2016年度短期大学部自己点検・評価(幼児教育学科)

短大基準協会	2016年度事業計画	内容と成果	課題	備考
その他	・地域連携活動	<p>長良川鉄道との地域連携である「“あそびスター”トレイン」、郡上市との連携活動である「ぐじょうファミリーフェスタ」、関市との連携活動である「SEKIいきいきフェスタ」を実施した。「“あそびスター”トレイン」「SEKIいきいきフェスタ」においては、「学生による地域貢献事業助成」を受けており、年間を通して計画的な活動が行われた。「“あそびスター”トレイン」においては、7年目の活動ということもあり、学生の成長に伴い活動内容のレベルが向上している。「ぐじょうファミリーフェスタ」の活動は4年目をむかえており、今年は遊びコーナーの内容充実を図るため継続的な指導の必要性からゼミ活動の一環として企画・運営に参加した。</p>	<p>地域連携活動は、学生が主体となり地域課題について調査・研究し、課題の解決に向けて地域の人々や公的な機関との継続的な協働により、解決策を提案・実施・評価することができる。そのため、ボランティア募集のような有志による集まりでは、継続的な事前準備や課題解決に向けての検討の難しさがあげられる。そのため、地域連携活動の活動グループの中心はゼミ単位またはゼミメンバーとなる場合が多い。これらのことから、今後、学科(ゼミ単位)での共同活動としても地域連携活動により多く参加できるように、指導面だけではなく予算面からも学科および地域連携推進センターと協力してバックアップ体制を整える必要がある。</p>	2016年度ボランティア実施一覧(資料 B)

2016年度短期大学部自己点検・評価作業用シート(社会福祉学科)

短大基準協会	2015年度事業計画	内容と成果	課題	備考
基準Ⅱ 教育課程と学生支援				
A 教育課程				
2 教育課程編成・実施の方針	・効果的な教育への取り組み	2015年度より授業・学習支援のための独自の学習管理機能・システムを備えたMoodleを活用し、主に前期開講演習科目「リラクセーションケア」(担当教員：横山さつき)と、後期実施の「介護福祉士国家試験対策講座」(担当教員：3学科(中部学院大学介護支援コース、短期大学部専攻科、社会福祉学科)の介護教員)で活用し、それを学生が授業時間外に自己学習ができる体制を整え実施した。また、模擬試験の結果を3段階にわけ、成績の悪い学生のみ少数人数で集中的に試験対策講座を実施した。さらに各授業でアクティブラーニングを積極的に取り入れ、グループワークなど参加型授業の形式を積極的に取り入れる工夫を行っている。	Moodleを用いた授業改善の取り組みが、一部の教員の一部の演習科目での取り組みに留まっている現状にある。Moodleの活用した科目は、自己学習につながる効果が確認されているため、他の科目でも導入をすすめてい必要がある。また、国家試験対策では全ての学生が自己学習に取り組むことができるよう、学生への呼びかけなどの検討が必要である。さらに授業評価は学期ごとに実施されているが、アクティブラーニングなど参加型授業の導入についての効果について、今後の検証が求められる。	
	・実習施設等との連携推進による効果的な実習教育と学生の実習満足度の向上を目指す。	介護基礎実習では、多様な介護ニーズに対応できるように高齢者グループホームでの実習配属人数を昨年度より増やした。実習事前指導では、多様な実習施設の種別、機能などについて、知識を深められるように授業を工夫した。養成校の実習担当者は、講義授業や演習授業の中で課題のある学生について、介護実習現場に実習に必要な情報を送り手厚い指導につなげた。介護現場で新たな実習課題が見つかった学生には別の実習先を確保し、再実習を課した。再実習の中で、自己課題を明確にさせた上で、課題解決に向かえるよう巡回指導を通して丁寧に個別指導を行った。今年度の再実習者は、1年生1名、2年生2名であった。	介護基礎実習では、高齢者グループホームを実習先として増やしたが、2施設で数人ずつの配属となっている。そのため、できる限り全ての学生が多様な実習種別で実習ができるように高齢者グループホームを含め、それ以外の在宅介護サービスでの実習など、多様な実習配属先を学生数分確保していきたい。また、老人保健施設の実習受入れ数が減ってきていることから、新規老人保健施設の実習先開拓していく必要がある。	

2016年度短期大学部自己点検・評価作業用シート(社会福祉学科)

短大基準協会	2015年度事業計画	内容と成果	課題	備考
	<p>・医療的ケア導入に向けた取り組み</p>	<p>2015年度は看護学科学と短期大学部社会福祉学科の教員10名で技術教育を実施した。今年度は看護学科の教員が所属学科の教育に専念する必要があるため、外部機関所属の8名の指導者(介護施設に就労する看護職員であり喀痰吸引等研修の主任指導者講習修了者)に依頼して10グループに分かれて演習を行った。学生の個性を踏まえた教育を行うことができるよう、修学上の課題が大きく指導に困難のある学生を社会福祉学科の教員が受け持つとともに、一貫した指導ができるよう10名の教員間の情報交換を行う時間を設けた。その結果、予定していた時間内(90分×10コマ分)に47名全員の学生が5手技、各5回以上の技術評価を指導者より受け合格となった。</p>	<p>今年度の技術教育(演習授業)は2015年度のように土曜日に4回開講する集中講義とせず、通常開講としたかった。しかし、外部機関に所属する指導者に1回1コマで10回演習授業のために大学に出向いてもらうことが難しかったため、12月10日(土)・11日(日)の9:10~18:10に集中開講した。学生にとっては集中して演習に取り組むことができ効率的な授業展開であったが、1日7.5時間×2日間連続して技術評価を行う指導者の心身への負担が過重となり、終盤は集中力が欠く様子が見られた。そのため、来年度は指導者を増員し、1グループ4名に指導者1名を配置して負担の軽減を図り、終始指導の行き届いた授業運営となるよう</p>	
	<p>・新コース導入の取り組み</p>	<p>〔介護福祉コース〕訓練生と合わせて1年生60名でスタートした。ほとんどの学生が介護福祉士取得を目指しており、授業や実習などほぼ一緒に取り組む一体感が保たれた。学習内容は、美デザインコース開設に伴い、介護福祉士指定科目以外の選択科目の統廃合を行ったが、多くは2年次開講科目にて本年度は学生の学習活動に大きい変化はない。一方で、本年度入学生から国家試験受験が義務化され、資格指定科目では定期試験までの中間期間に小テストを実施し学習定着度を評価する体制を準備した。これらの取組みを通して、基礎的学習力や学習習慣に支援が必要な学生、また対人関係を苦手とする学生などへの早期の対応が可能になってきている。</p>	<p>2016年度より、2つのコースの科目はすべて選択科目とし、両コースでも履修できる科目を設け学びの選択肢を広げる形をとっている。しかし、時間割上の制約や、必要とする用具の自己負担費用などから、実際には履修の幅を活かし切れていない。また2つのコースを置くために、介護系選択科目の統廃合を同時にすすめてきたが、「表現活動(和太鼓)」や「セラピー入門」などコミュニケーションの基礎力を実技を通して学ぶ科目が廃止された。これらは介護の前提となる対人関係力の養成を外部に分かりやすく伝える科目でもあつ</p>	

2016年度短期大学部自己点検・評価作業用シート(社会福祉学科)

短大基準協会	2015年度事業計画	内容と成果	課題	備考
		<p>〔美・デザインコース〕 2016年度より「介護福祉コース」とはタイプの異なる履修モデルとして「美・デザインコース」を設け、2コースでのスタートとなった。「美・デザインコース」では、生活の豊かさを提案する体験型科目ネイルケア・ネイルアートやブライダルマネージメントの実習系科目に加え、医療事務、調剤事務などの実践資格取得を目指す科目を用意した。また実際の現場で学ぶ教育方法として「有給インターンシップ」を導入し、学生が自ら提案・発信できる実践的就業力の養成を目指した。基礎ゼミでは発信力を養う目的でビブリオバトルの開催、長良川鉄道を題材にしたショートムービー制作も行っている。</p>	<p>美・デザインコースの開設にあたり、想定される学生のニーズや本学の特徴を鮮明にしたカリキュラム編成を目指し、科目の設定や担当教員の配置を検討したが、ネイルケア・ネイルアート、医療事務などの資格取得を目指す科目では、検定合格への指導方法や学習時間のさらなる調整が必要である。またブライダルマネージメントの実習はオムニバスでブライダル施設での委託実習を行ったが、講習内容等の調整・最適化が課題である。有給インターンシップについては、学生の基礎的なマナー修得、就業ニーズとの調整等が課題として浮かんでおり、掲載先は</p>	
	<p>国際交流活動の実施</p>	<p>以下の2つの国際交流プログラムを実施（計画）した。</p> <p>1. フィリピン・ミンダナオ国際大学（MKD）との交流・研修 MKDからの要請に基づいて、本学科教員による「日本の介護についての特別講義」を実施すると共に、今後の交流の方向性について先方のマリヤリ学長と協議した。〔期日〕2015年8月4日（火）～8日（土）〔参加教員〕吉川杉生、高野晃伸、志村真</p> <p>2. 特別講義「アジアの保健・福祉を学ぶ」 愛知県日進市の「アジア保健研修所（AHI）」から講師を招き、アジアの地域保健／福祉についての研修を1，2年生合同で行った。〔期日〕10月15日（木）4限。〔講師〕ズバイダ・シヤミン・</p>	<p>これらのプログラムを継続させて、国際交流を確かなものとしていきたい。2015年度は、10月中旬に2週間の日程で予定されていた、MKDからの学生の受け入れが渡航手続きの関係で次年度に延期されたことは残念であった。2016年は確実に実施したい。</p>	
<p>3 入学者受け入れの方針</p>				

2016年度短期大学部自己点検・評価作業用シート(社会福祉学科)

短大基準協会	2015年度事業計画	内容と成果	課題	備考
4 学習成果の査定	<ul style="list-style-type: none"> 達成度評価の検討 	<p>2015年度入学生より学生個人の評価ファイルを用意し、2年間3回実施される全ての介護実習終了後、評価尺度シートに自己評価を記入することで、学生自身の達成度や成長の経緯を評価をおこなった。2回目以降の実習では、実習前にこれまでの自己評価シートを学生に確認させ、次の実習に向けた自己課題を自分自身で意識づけできるようにし、具体的な課題意識を持って望む体制を整えている。さらに実習終了後には、目標に対してどの程度達成できたのかを確認することで、今後の授業や実習での前向きな取り組みにつなげた。</p>	<p>2015年度入学生は、自己評価の各項目では、実習毎に達成度が向上していることが伺えるため、学生自身で達成度を自覚する取り組みについて一定の評価をすることができている。しかし、全ての実習を終えたところで、同取り組みに対する学生の学びの効果の検証を行うことが出来なかった。また学生が評価ファイルを確認する時期が実習前後と限られていたため、日頃の学内での学びの中でも随時確認をおこない、常に自覚を持って学習に取り組む環境を構築する必要</p>	
5 学生の卒業後評価	<ul style="list-style-type: none"> 卒業生の把握と同窓会の組織化(介護事業所への調査を含む) 	<p>昨年に引き続き、学内の「教育改革研究費」の助成を得て、本学を卒業し介護現場で働いている職員の交流および研鑽の場を提供するために、「介護現場で活躍している卒業生」交流会を開催し、大勢の卒業生が参加した。</p>	<p>「介護現場で活躍している卒業生」交流会は、短期大学部・社会福祉学科のみではなく、同専攻科、中部学院大学人間福祉学科介護支援コースの卒業生にも呼びかけ、介護現場のさまざまな話題を語り合い、課題を検討し認識を深め、資質を高めていく場として、3年前から年2、3回のペースで会を重ねている。今後も定期的に開催し、会の定着・発展を図って</p>	
B 学生支援				

2016年度短期大学部自己点検・評価作業用シート(社会福祉学科)

短大基準協会	2015年度事業計画	内容と成果	課題	備考
1 学習成果獲得に向けた教育資源の有効活用	<ul style="list-style-type: none"> FD活動への取り組み(授業改善に向けた取り組み) 	<p>2016年度も引き続き、短期大学部全体でFD活動に取り組んだ。今年度は継続的な学びとなるようなFD研修を実施した。また、FDとSDとの連動・協働に向けた検討会を2回開催し、FDとSDの合同研修会を開催するに至った。具体的には、配慮の必要な学生に対してどのように教職協働をしていくのかを追求するために、①外部講師(専門家)を招いての講演会を開催し、学生への合理的配慮について考える機会を設け、②効果的な学生支援のために必要な教職協働のあり方を検討する準備としてFDとSDの合同研修会を開催して、③事例検討会を開き、配慮の必要な学生への支援について具体的に考える機会を設けた。(詳細はFD研修会開催資料を参照)</p>	<p>3回に亘る研修会が、配慮の必要な学生に対してどのように対応したらよいか、どのように教職協働をしていくのかを考えるよい機会となり、教職員個々の知識や意識が高まった。しかし、組織のシステム変容には至っていない。したがって、教職員の管理運営や教育・研究支援までを含めた資質向上のための組織的な取り組みに発展させる必要がある。</p>	<p>第1回～3回のFD研修会開催資料及び開催報告書</p>
2 学習成果獲得に向けた組織的学習支援	<ul style="list-style-type: none"> 入学時の学習適応への支援(基礎ゼミの活動、宿泊研修、その他)初年次教育 	<p>入学時の学習適応に向けた支援について、例年通り「基礎ゼミナール」を中心に進めている。ゼミ活動は、高卒すぐの学生と訓練生が同時に学ぶ特性を考慮し、4つのゼミの合同学習を軸に進めた。一方で、各ゼミごとゼミ長を決め、教員と月1回のゼミ長会議を設け意見聴取や行事参加の企画相談等を行い、大学祭参加などにつながった。宿泊研修は、学生主体の実行委員会を設けて、学生交流のよい機会となった。また初年次教育では、ゼミ合同で基礎学習として文章作法や新聞記事の要約方法を学習し、後期ではレポート作成プログラムを実施している。このことについては、</p>	<p>訓練生同士のグループや個人間の関係がこじれ、教員や保健室が介入しても問題が長くつづく課題に直面した。さらに、そのトラブルに高卒すぐの学生も影響を受け、その都度教員が調整や意見聴取の機会を持つなどの指導にあたった。介護の授業では少人数のグループでの活動も多いため、グループ作りやクラス編成にも配慮する必要性が生じた。対策として、</p>	

2016年度短期大学部自己点検・評価作業用シート(社会福祉学科)

短大基準協会	2015年度事業計画	内容と成果	課題	備考
	<p>・国家試験対策</p>	<p>卒業時共通試験対策と2017年度の国家試験実施にむけた準備として、介護福祉士全国統一模擬試験を2回（基礎編・実力編）7月と11月に実施した。そこで、7月の模試で、6割取れない学生を対象し、3学科（人間福祉学部介護支援コース、短期大学部専攻科、社会福祉学科）の介護教員が集中講義形式で修得度別対策講座を合同実施。さらに11月実施の模擬試験で6割取れない学生を対象に、学科教員が科目別に共通試験対策を行った。また、Moodleを利用したe-ラーニングによる学習システムを活用し、各科目100問の問題を、学生が授業以外の時間に、自主的に学習を進められるようにした。</p>	<p>次年度より国家試験が導入されるため、全員が合格できるよう、効果的な対策を構築する必要がある。具体的な取り組みとして、全授業内容を12月中に終了し、1月に国家試験対策講座を1月に科目として設け、集中的に試験対策を実施していく。また、それまでの授業で、指定科目で中間試験など随時実施し、また国家試験を見据えた授業内容とすることで、学生が継続して学習できる環境を構築する。さらに模擬試験実施回数と時期を検討や、授業外で自己学習できる教室など環境を確保するなど。</p>	<p>別添資料： 2016年度全国介護福祉士模擬試験結果</p>
<p>3 学習成果獲得に向けた学生への組織的な生活支援</p>	<p>学生生活支援の取り組み</p>	<p>昨年度は職業訓練生が半数を占める現状において、社会人学生と現役学生間のトラブルからくる学生相談が多数あった。そのため、入学時や随時実施（数か月に1回の頻度で実施しているレクチャー（社会人学生への現役学生との関わり方や学生としてのふるまい、就職活動等についてのレクチャー）の内容を充実させ、事例を踏まえ具体的に提示・指導するよう努めた。また、学生個々が話しやすい教員に気軽に他の学生への不満を言い放つことによる混乱や一貫性のない対応を避けるため、できるだけ学生支援員の教員が情報を集約し、学生相談のシステムに乗せ、教員だけでなく保健室の看護師やカウンセラーとの連携のもとに対応した。その結果、負の影響が不特定多数の学生に波及することを防ぐことができています。</p>	<p>入学してからの学生のフォローも重要であるが、入学させることが学生の将来の選択の幅を狭めることになりかねないことも踏まえ、入学時の選抜を慎重に行った。しかし、1年次に訓練生5名、現役生5名（介護福祉コース1名、美デザインコース4名）の退学者が出た。また、発達障害等により学修や生活上の課題を持つ学生への合理的配慮について混迷するケースが増えてきた。このような学生の早期発見、早期介入が課題である。</p>	

2016年度短期大学部自己点検・評価作業用シート(社会福祉学科)

短大基準協会	2015年度事業計画	内容と成果	課題	備考
4 進路支援	就職率100%に向けた取り組み	2015年度卒業生も、就職希望者はすべて就職先が決まり、そのうち95%が介護・福祉職に就いている。卒業後の進路に関してはゼミ担当教員が主となり、学科教員全員とキャリア支援センターが学生ひとり1人の希望を受け止めながら個別に支援を展開している。卒後の進路選択に向けて入学時より全体への働きかけまた個別への対応を開始しているが、年度により介護の求人・採用の出足がおそく、内定も遅れるという傾向も見られた。	毎年、数名の学生が、希望どする就職先に就労できなかつたり、さまざまな事情により就労を保留している。就労に向け個別に課題を抱えた学生への早期からの支援をどうすすめるかという課題も浮かび上がっており、キャリア支援センター・各ゼミ担当の教員による柔軟な対応が求められている。	別添資料： 2015年度（2016年3月卒業者）進路状況
5 受験生に対する受け入れ方針の明確化	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高大連携講座 ・ オープンキャンパス 	<p>連携協定を結んでいる高校を対象に介護講座を実施。済美高校では、2、3年生を通した「めざそう快護人」の講座を開講した。2年間の講座を修了した生徒には、本学入学後に一般教養科目で単位認定している。この他、高大連携事業として済美高校・関有知高校と介護福祉コースの本学科学生が共同で関市内グループホーム大運動会を関市総合体育館で開催した。また、済美高校、関商工高校、郡上高校写真部と美・デザインコースの本学科学生が連携し、長良川鉄道活性化をめざし沿線周辺の暮らしをテーマに取材・写真撮影・ショー</p> <p>介護福祉コース及び美・デザインコースともに学生の学びや成長が高校生に分かりやすく伝わるように、在学生在が司会進行を行い、模擬演習を行った。オープンキャンパス参加状況は、両コースともに7月が一番参加者が多かった。また、リピーターも多く、オープンキャンパスでの月別に異なる内容の模擬授業や演習への参加を楽しみにしていることが分かったことから、各月オープンキャンパスを開催する意義は大きい。参加した高校生には、在校生の活躍場面をみてもらうように工夫し、直接、在校生から短大生活の実際を高校生に話してもらうように試み、アットホームな雰囲気漂うオープンキャンパスとした。</p>	<p>「めざそう快護人」の講座を受講した済美高校の生徒の中からオープンキャンパスへの参加につながり、3名がAO入試受験につながった。また、高大連携事業において、済美高校写真部の生徒の中から、1名がAO入試を受験した。高大連携事業を今年度初めて実施したが、高校教員と連携することで交流が深まった。高校と短大が連携した取り組みが継続することで</p> <p>毎年5月～9月まで各月のオープンキャンパスでは模擬授業・演習内容を工夫し高校生の参加率アップをめざし、入試につながるように学科教員全員参加で対応している。参加者数は7月が最も多く次いで8月であった。過去5年間の7月高校生の参加状況を見てみると、5年前32人に対し昨年度は68名の参加者であった。今年度は昨年度に比べ1名減であった。少子化の影響もあり高校生総数の減少は察するところであるが、他大学にはない本学科ならではの魅力ある模擬授業や演習内容を考えて参加者数の</p>	オープンキャンパス参加状況資料参照

2016年度短期大学部自己点検・評価作業用シート(社会福祉学科)

短大基準協会	2015年度事業計画	内容と成果	課題	備考
	<p>・多媒体での広報</p>	<p>重点高校を決め教員が分担をして年3回高校訪問を行い、入試案内、奨学金制度など進路担当に説明した。職業訓練生の募集につき、広報を以下の通り行った。①1月下旬から説明会を全3回開催。②岐阜・関・美濃加茂市・各務原に新聞の折り込みチラシの配布や無料情報誌による広告掲載。③介護実習施設へ巡回教員より広報活動。④笑顔写真展の場所を借り、イオンマゴにて掲示。⑤ホームページにて広報。⑥愛知県内の広報手段として、「ローズ」タウン誌に募集案内及び説明会開催案内の記事を掲載。愛知県内の一般地域住民に対し広報。⑦岐阜市、関市、大垣市、美濃加茂市、多治見市、一宮市のハローワークの窓口担当者に入試案内や手続き方法を説明</p>	<p>高校訪問は、夏季休業前に教員が分担して計画的に入試案内を行うことができた。職業訓練生の募集案内は、1月中旬から広報活動が可能になるため、3月中旬に行われる入試まで約2か月間で岐阜県内・愛知県内を中心に広範囲に広報をする必要がある。広報活動開始が可能になる直前に、チラシ作成や情報誌掲載依頼に取り掛かり、時間に追われながら作業をしている状況のため、年度初めに職業訓練生募集に関する役割を検討し速やかに準備が定められるようにすべき</p>	
	<p>・介護の日</p>	<p>11月11日の「介護の日」啓発活動を2009年度から学外にて行っている。2016年度は昨年を引き続き11月3日に本学各務原キャンパスと各務原市との共催で開催される「学びの森フェスティバル」において、介護の日PR活動と介護に携わっている方に対して感謝の気持ちを込めたバラの花を手渡した。メインステージでのPR時間は、学生全員がステージ上にあがりメインキャスターも学生が務めPRを行なった。活動前に学生キャラバン隊を編成し、岐阜新聞・中日新聞・NHK岐阜放送局を事前訪問し、活動のアピールをおこなった。これにより、各新聞やインターネット上で取り上げられている。</p>	<p>2009年度から継続して行っている活動であるため、地域の方々に対する認知度は上がっているといえる。しかし、昨年同様に介護福祉士会や社会福祉協議会などの活動との差別化を図ることで更なる広報に繋げていく必要がある。しかし、同取り組みは、授業の妨げにならないように、土日曜日で開催することが多いため、学生の負担が少なからず発生している。そのため、開催日や場所など、より効果的であると共に負担の少ない活動方法の検討が必要といえる</p>	<p>別添資料5： 「介護の日」啓発活動チラシ</p>
<p>基準Ⅲ 教育資源と財的資源</p>				
<p>A 人的資源</p>				

2016年度短期大学部自己点検・評価作業用シート(社会福祉学科)

短大基準協会	2015年度事業計画	内容と成果	課題	備考
2 教育課程編成・実施の方針に基づく教育研究活動	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教員研修 ・ 研究状況 	<p>科学研究費助成事業は新規採択が4件(研究代表者2件:基盤研究1件、挑戦的萌芽研究1件、研究分担者4件:基盤研究2件、挑戦的萌芽研究2件)交付決定額の合計1,885,000円、継続が1件(研究代表者1件:基盤研究(B))交付決定額2,600,000円である(交付決定額については総額ではなく2016年度配分額)。2017年度公募分の新規申請中は3件である。学内特別研究費助成については、教育改革研究事業(学長裁量経費)が1件で交付決定額は236,000円である。</p>	<p>本年度も昨年に引き続き、学科教員全員が競争的外部資金(科研費助成)に申請を行なった。学生に対して質の高い教育を提供するためにも、一層の教員が研究に取り組むことができる環境づくりと意識の醸成が必要である。</p>	<p>別添資料6: 2016年度研究費採択状況</p>
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域連携活動の推進 ・ 卒後教育(介護福祉セミナー) 	<p>大学所在地である向山団地自治会をはじめ、大学が連携協定を取り結んでいる自治体や福祉施設と密接にかかわりながら教育活動を展開している。以下の積み重ねの結果「地元で強い中部学院大学短期大学部」として知名度と信頼が高まり、学生の就職活動に多に役立っている。</p> <p>具体的には、①向山長寿会のみなさんと学科1年生によるグランドゴルフ交流会の開催、②介護技術実技授業に向山長寿会のみなさんを迎えて実施、③入学時宿泊研修の村内各地での交流活動を白川村役場と住民のみなさんの協力により実施、④飛騨地区福祉の仕事相談会の実施、⑤関市内グループホーム大運動会 などである。</p> <p>「第16回介護福祉セミナー」を2017年3月に開催する。「寄り添うケアの追求」をテーマとして、午前のシンポジウムでは、介護現場でおこる「不適切ケア」の予防について、様々な立場の方をシンポジストとして招き、議論する。午後には、介護アドバイザーの青山幸広氏をお招きし、その取り組みについて演習を交えて学ぶ。</p>	<p>活動先となっているのは、学科教員が研究活動で関わってきた自治体や福祉施設が中心である。年を重ねるごとに「社会福祉学科」と活動先との関係が構築できつつある。今後は、企画準備段階から実施に至るプロセスにおいて学生の積極的参画を促し、地域社会の方たちと交流が進むよう工夫する必要がある。</p> <p>来年度は、法人設立100周年の記念事業として、岐阜県および周辺地域の介護関係者を広く巻き込んで意義のあるセミナーを開催する。そのために、早期より多くの関係者に呼びかけ実行委員会を発足させ、開催の期日や内容、広告の方法を見直し、より広く、参加しやすく意義のあるセミナーになるように協議し、実行する。</p>	<p>別添資料7: 2016年度飛騨地区福祉の仕事相談会のチラシ</p> <p>別添資料8: 2016年度入学時宿泊研修村内交流活動</p>

2016年度短期大学部自己点検・評価作業用シート(社会福祉学科)

短大基準協会	2015年度事業計画	内容と成果	課題	備考
	<ul style="list-style-type: none"> 卒業時共通試験 	2017年2月に実施された卒業時共通試験では、受験者全員が合格し、介護福祉士を取得することができた。それにむけ、模擬試験および対策講座を重ねて行い、よい結果が得られた。	来年度は、介護福祉士取得を希望する学生は国家試験を受験し、合格せねばならない。そのための対策を万全に実施し、全員合格を目指す。	